

曾根遺跡群Ⅳ

福岡県糸島郡前原町大字曾根他所在遺跡群の調査

前原町文化財調査報告書

第 27 集

1988

前原町教育委員会

曾根遺跡群Ⅳ

福岡県糸島郡前原町大字曾根他所在遺跡群の調査

序

本町は、古代「伊都国」の地として広く知られ、注目をうけております。

今回の報告は、その「伊都国」の実体を明らかにする上で重要であるとされている「曾根丘陵」上に点在する遺跡群についてのものであります。この地においては、一部は「曾根遺跡群」として国指定史跡となっており、重要な文化財の保護・保存・整備を行っていますが、まだまだ不十分な点も多く、今後もなお一層、努力する所存でございます。そして、本書も、その一環として発行するものであります。

本書が、私たちの郷土の歴史を明らかにするひとつの手がかりとなるとともに、大切な文化財の保護・保存の一助となれば幸いです。

また、今回の報告をするにあたり、ご協力いただいた方々に、この場を借りて、心から感謝申し上げます。

昭和63年3月31日

前原町教育委員会

教育長 河原吉美

例 言

1. 本書は、福岡県糸島郡前原町大字曾根他に所在する曾根遺跡群の埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 今回の報告の中のワレ塚古墳と銭瓶塚古墳は、国指定史跡「曾根遺跡群」の構成遺跡である。また、高上石町遺跡と山北ハビロ遺跡は、指定地外であるが、それぞれ、遺跡群が所在している通称「曾根丘陵」の隣接地、基部に位置するので、同一遺跡群としてとりあつかった。
3. 発掘調査は、前原町教育委員会が主体となって実施した。
4. 本書に用いた地図は、国土地理院発行の2万5千分の1地形図および前原町都市計画課保管図から作成した。
5. 掲載図の実測、製図および図版作成の分担は、目次に示すとおりである。
6. 遺物の整理は、前原町文化財復元室の整理作業員が行い、同所に保管している。
7. 本書は、川村 博・阿部裕俊・林 寛が執筆し、林が編集した。

本文目次

I. 調査にいたる経過と概要	1
II. 位置と環境	4
III. 調査の記録	4
1. ワレ塚古墳	4
遺構	6
遺物	7
小結	7
2. 銭瓶塚古墳	9
遺構	9
周溝	9
その他の遺構	9
遺物	11
埴輪	11
その他の遺物	12
小結	12
3. 高上石町遺跡	15
遺構	15
1号甕棺墓	15
2号甕棺墓	15
遺物	17
1号甕棺	17
2号甕棺	19
小結	19
4. 山北ヘビロ遺跡	19
遺構	19
掘立柱建物	19
溝状遺構	21
遺物	23
小結	23
IV. 結語	23

挿 図 目 次

第1図	曾根遺跡群位置図 (1/25,000 林 覚作成)	3
第2図	ワレ塚古墳の調査区とその周辺 (1/2,500 林作成)	5
第3図	ワレ塚古墳遺構配置図 (1/250 川村 博・石井扶美子実測、林製図)	6
第4図	S D 01模式断面図 (1/20 川村・石井実測、石井製図)	7
第5図	S X 01模式断面図 (1/20 川村・石井実測、石井製図)	7
第6図	銭瓶塚古墳の調査区とその周辺 (1/2,500 林作成)	8
第7図	銭瓶塚古墳遺構配置図 (1/150 岡部裕俊・林実測、林製図)	10
第8図	トレンテ北壁断面図 (1/80 林実測・製図)	11
第9図	出土埴輪実測図 (1/4 林実測・製図)	11
第10図	銭瓶塚古墳実測図 (1/400 川村他実測、池田千春製図)	13
第11図	高上石町遺跡位置図 (1/2,500 林作成)	14
第12図	1号甕棺墓実測図 (1/20 林実測、岡部製図)	15
第13図	2号甕棺墓実測図 (1/20 岡部実測・製図)	16
第14図	1号甕棺実測図 (1/8 中尾嘉孝実測、林製図)	17
第15図	2号甕棺実測図 (1/8 林実測・製図)	18
第16図	山北ハビロ遺跡の調査区とその周辺 (1/2,500 林作成)	20
第17図	山北ハビロ遺跡遺構配置図 (1/100 林実測・製図)	21
第18図	掘立柱建物跡実測図 (1/50 林実測・製図)	22

図版目次

- 図版1 ワレ塚古墳Iトレンチ
同 IIトレンチ
- 図版2 同 IIIトレンチ
同 SD-01
- 図版3 同 SX-01
- 図版4 銭瓶塚古墳調査区全景(南から)
同 上 (東から)
- 図版5 同 周溝出土状況
同 上 近景
- 図版6 同 周溝土層断面(南から)
- 図版7 同 出土埴輪
- 図版8 高上石町遺跡遺景(東から)
同 上 (北から)
- 図版9 同 1号甕棺墓
同 2号甕棺墓
- 図版10 同 上
- 図版11 同 1号甕棺
同 2号甕棺
- 図版12 山北ハビロ遺跡調査区全景(北から)
同 掘立柱建物跡(南から)

I. 調査にいたる経過と概要

ワレ塚古墳

ワレ塚古墳は、福岡県糸島郡前原町大字曾根431番地に所在する。

昭和58年8月18日、前原町大字曾根429番地を宅地として開発する旨の埋蔵文化財発掘届が、当該地の所有者である佐藤展子氏から文化庁長官宛に提出された。

当該地は、国指定史跡「曾根遺跡群」のうちのワレ塚古墳（前方後円墳、墳丘長43m）の墳丘部に隣接しており、同古墳の周溝・周堤などの遺構が存在することが十分に考えられる重要な地域であることから、前原町教育委員会では、関係者との協議を重ね、発掘調査を実施することに決した。

発掘調査は、昭和59年4月25日から同年5月30日まで実施した。

銭瓶塚古墳

銭瓶塚古墳は、福岡県糸島郡前原町大字曾根359番地に所在する。

銭瓶塚古墳は、前方部が西へ向く前方後円墳であるが、県道によって前方部が切断されるなどしており、現況では、その形状・規模を正確に把握することはむずかしい。

本遺跡については、昭和58年に、県道をはさんで西側に隣接する地点（現町有地）で発掘調査が実施され、墓石を持つ前方部・周溝・埴輪などの存在が確認されている。
(註2)

今回の調査は、後円部の南東に隣接する地点（前原町大字曾根333番地）を宅地として造成する旨の現状変更許可申請が、昭和61年5月23日に、所有者の行弘義徳氏から文化庁長官宛に提出されたことをうけ、ワレ塚古墳の場合と同様に、当該地点に周溝などの遺構が存在する可能性が高いため、当教育委員会では、関係者との協議を行い、発掘調査を実施することに決した。

発掘調査は、昭和61年9月30日から同年10月13日まで実施した。

高上石町遺跡

昭和60年11月17日、前原町大字山北在住の井上庸夫氏から当教育委員会に対し、「所有の畑地で農作業中に、土中に穴が現われ、中から大きな土器の破片が出て来た。」との知らせがあり、担当者が現地（前原町大字高上227番地）で、それが墓棺墓であることを確認した。

農作業中のことでもあり、現状のままでは遺構・遺物の消失はまぬがれないため、井上氏の協力を得て、当該墓棺墓についてのみ発掘調査を実施することとした。

発掘調査は、昭和60年11月19日に行い、この遺構を高上石町遺跡1号墓棺墓とした。

つづいて翌年昭和61年9月24日、再び井上氏から「土器出土」の連絡があり、現地で墓棺墓と

確認したので、1号甕棺墓のときと同様に対応することとし、発掘調査を行った。

発掘調査は、昭和61年9月27日に行い、この遺構を高上石町遺跡2号甕棺墓とした。

山北ハビロ遺跡

山北ハビロ遺跡は、福岡県糸島郡前原町大字山北59番地に所在する。

昭和61年度県営は場整備事業において、追加申請が提出されたため、当該地の試掘調査を行ったところ、遺構の存在が確認された。

関係者間で協議を重ねた結果、遺構の一部消失は避けられないという結論を得たので、この部分についての発掘調査を実施し、記録保存することに決した。

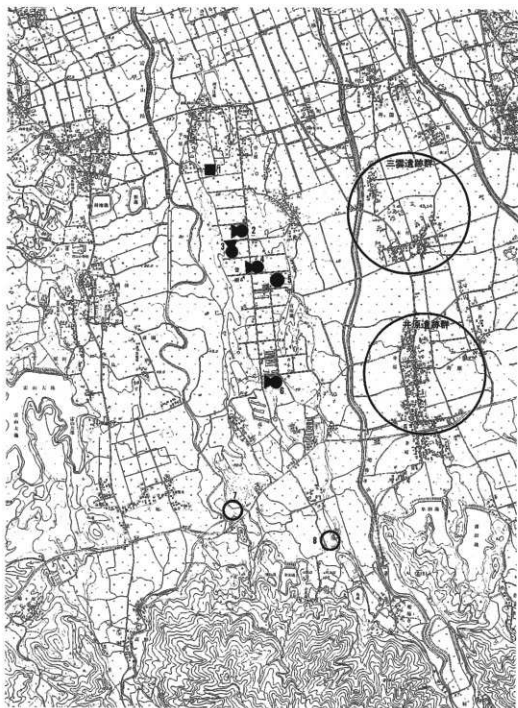
発掘調査は、昭和62年1月7日から同年1月12日まで実施した。

調査の組織

調査主体 前原町教育委員会

総括	教育長	豊島禮蔵（昭和59年度まで）
	”	河原吉美（昭和60年度より）
	社会教育課長	中原直國（昭和59年度まで）
	”	野口治三（昭和60・61年度）
	文化係長	古村耕治
庶務	社会教育係長	徳重 認（昭和60年度まで）
	”	矢野豊秋（昭和61年度より）
	主事	久保静代
調査	文化係主事	川村 博
	”	林 覚
	”	岡部裕俊
	嘱託	常松幹雄（昭和59年度まで 現福岡市教育委員会埋蔵文化財課）
	調査補助員	石井扶美子（別府大学考古学専攻卒）

なお、今回の報告が過年度調査分のものとなったことについては、本来ならば各年度中に報告書を刊行すべきところであるが、近年の発掘調査量の増加のために、整理期間や報告書刊行費の不足などが生じたためであり、条件の整った本年度に合本のかたちで刊行することとなった。



- | | | |
|----------|-------------|---------------|
| 1. 平原遺跡 | 2. 先山古墳(消滅) | 3. ワレ塚古墳 |
| 4. 鉄瓶塚古墳 | 5. 狐塚古墳 | 6. 高上大塚古墳(消滅) |
| 7. 高上遺跡 | 8. 山北ハビロ遺跡 | |

第1図 首根遺跡群位置図 (1/25,000)

Ⅱ. 位置と環境

国指定史跡「曾根遺跡群」は、福岡県糸島郡前原町大字曾根他に位置する通称「曾根丘陵」上に存在している。

曾根丘陵は、背振山系雷山山麓から北へ向かって舌状に委り出した、東西幅500～600m、長さ約2.5kmの台地である。

曾根遺跡群は、4世紀から6世紀ごろに造られた古墳群がその中心であり、確認されている古墳は、北から順に、平原遺跡（方形周溝墓、国指定）・先山古墳（前方後円墳、消滅）・ワレ塚古墳（前方後円墳、国指定）・銭塚古墳（前方後円墳、国指定）・狐塚古墳（円墳、国指定）・高上大塚古墳（前方後円墳、消滅）である。

平原遺跡は、昭和40年に、福岡県教育委員会によって発掘調査が行われ、径46.5cmの仿製鏡4面をはじめとして42面の銅鏡や玉類・素環頭大刀などを副葬した方形周溝墓などが確認された。
(註3)

銭塚古墳は、先述のとおり、当教育委員会が昭和58年に、前方部の一部を調査しており、葺石や埴輪が出土し、5世紀中葉の前方後円墳と考えられる。

狐塚古墳は、昭和56年に、当教育委員会が発掘調査を行い、竪穴系横口式石室を主体部とする葺石を有する三段築成の円墳であることが確認され、5世紀後葉の古墳と考えられる。
(註4)

高上大塚古墳は、前方後円墳であったと言われているが、その規模・時期については、不明である。しかし、石室が破壊された時に、鹿角製刀装具が出土しており、現在、関西大学に保管されている。

高上石町遺跡と山北ハビロ遺跡は、曾根丘陵の基部に位置しているが、厳密に言えば、高丘石町遺跡は、丘陵基部から北西に小さく張り出した別尾根の丘陵上に位置しているとすべきであろう。

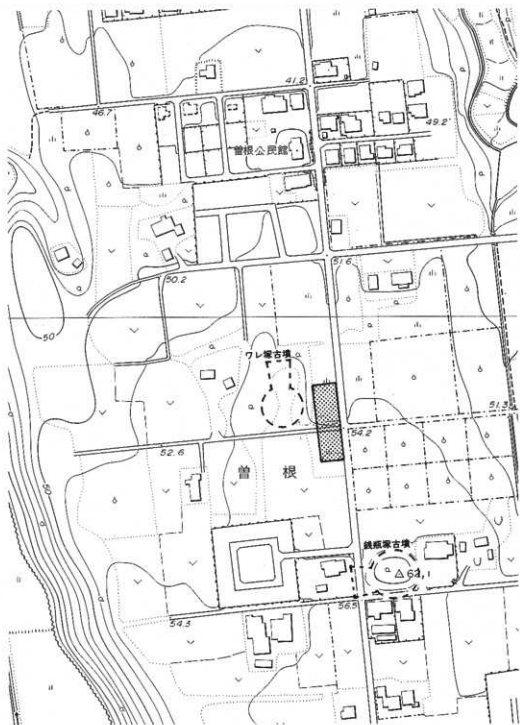
丘陵の東側には、弥生時代から古墳時代前期を中心とする三雲・井原遺跡群のある平野が広がっている。

Ⅲ. 調査の記録

1. ワレ塚古墳

ワレ塚古墳は前方後円墳で、その存在は早くから知られ、曾根遺跡群のひとつとして昭和56年10月4日に国指定史跡となった。指定以前に墳丘測量調査を実施したが、古墳の周溝を確認することができなかった。

今回の調査では、前述の経過もあり、周溝の確認を調査の主眼においた。



第2図 ワレ塚古墳の調査区とその周辺(1/2,500)

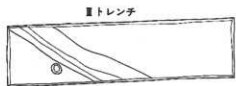
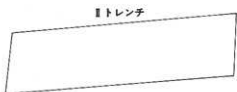
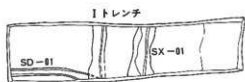
遺構

調査にあたって、トレンチを3本、東西にはほぼ古墳主軸に直行するように設定した。南側より、それぞれ、Ⅰ、Ⅱ、Ⅲトレンチと名づけた。

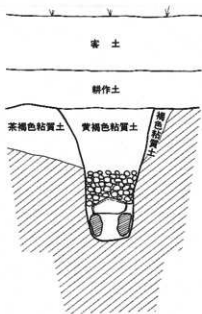
Ⅰトレンチでは、SD01・SX01を検出した。なお、層序は、上層より客土層、旧耕作上層で、旧耕作土下層の黄褐色粘質土で遺構を検出した。

SD01はⅠトレンチの南西部で検出し、幅約50cmを測る。深さは約70cmで、その埋土は上層で黄褐色粘質土であり、地山の削平土を埋め戻したものと考える。中層は礫層であり下層に塊石を用いて階層的に石組みを施している。時期的には不明な点もあるが、古墳周溝の排水溝の可能性もある。

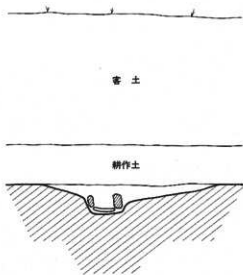
SX01は、Ⅰトレンチの中央部でSD01を切って検出した。SX01の両側には溝を検出した。溝の底部間の幅は約3mである。東側溝の方は素掘りで比較的浅く、西側は



第3図 ワレ塚古墳遺構配置図(1/250)



第4図 SD01模式断面図(1/20)



第5図 SX01模式断面図(1/20)

素掘りの後底部に塊石を平行に並べ底部に木板を敷いていたようである。底部の一部に木質が検出されている。SX01は道路状の形状を呈しており、東西溝は道路の側溝の性格のものであろう。

Ⅱトレンチでは、遺構の検出はできなかった。なお、このトレンチではサブトレンチも設定したが、下層も同様であった。

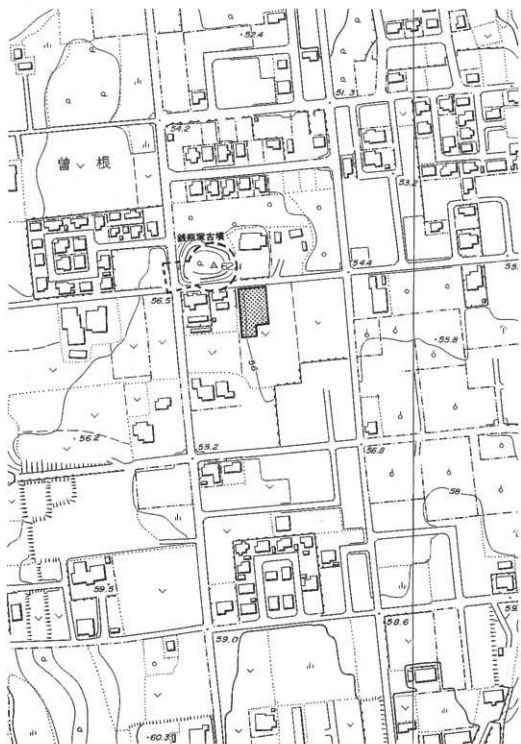
Ⅲトレンチでは、溝1条と柱穴1個を検出した。溝は、地山を掘削しており、検出面で幅1.7～1.8m、底面で幅0.3～0.5mを測り、深さ約1mである。埋土は地山に近い淡黄褐色粘質土で、灰褐色粘質土のブロックを含む単層である。柱穴は溝の南側で検出したが、建物跡を確認するものではない。溝、柱穴の時期は不明である。

遺物

出土遺物は皆無に近く、SD01の検出時に陶器を出土しただけであるが、時期決定の根拠にならないものではない。

小結

今回の調査では、ワレ塚古墳の外部施設等と考えられる遺構は検出できなかったが、SD01は前述のとおり周溝の排水溝の可能性もある。また、現時点では、ワレ塚古墳の墳裾と今回の各トレンチとの間隔が約30～40mあることから、この間に周溝が存在する可能性もある。さらに、ワレ塚古墳の主軸がほぼ南北であることから、周溝の形状について、今後、古地図・古字図の検討が重要であると考えられる。



第 6 図 鏡瓶塚古墳の調査区とその周辺 (1/2,500)

2. 銭塚古墳

銭塚古墳は、丘陵全長約50m、後円部径約37mの西向き前方後円墳で、これまでの調査によって、墓石を有する古墳で、埴輪が樹立されていたことが明らかとなっている。また、前方部の調査によって周溝の存在も確認され、前方部前面で幅約6mであった。発掘調査による出土ではないが、家形埴輪が出土しており、現在、伊都歴史資料館に保管されている。

今回の調査は、昭和58年度の調査結果を踏まえて、周溝の存在を後円部周辺で確認するとともに、先の調査では確認できなかった周堤の存在について明らかにすることを一つの大きな目標として行った。

当該地は、面積約500㎡の畑地で、全体的には東方に向かって（墳丘から離れる方向）傾斜しているが、墳丘に近い北西隅では墳丘に向かって窪地となっており、周溝の存在を予想させていた。

遺構

周溝

遺構上面は、耕作土層直下で検出された。

周溝は、予想どおり調査区の北西隅に、半径約4.5mの扇形に検出された。

断面で見ると、2段掘りの状況を呈している。すなわち、遺構上面からゆるやかに（水平距離で約1.3m）地山を掘り込み、そこから傾斜を急にして周溝底へとつづいている。しかし、これが、古墳築造当初から2段であったかについてはやや疑問が残る。周溝の埋土の土層を観察してみると、大きく分けて2層に分けることができ、その境が1段目の掘り込みに対応しており、一時期この面を底とする溝であったと考えられるのである。築造当初の周溝が時間を経て埋没し、ある時期に再度掘りかえされた結果、今回検出した、1段目の掘り込みが生じた可能性があるのである。

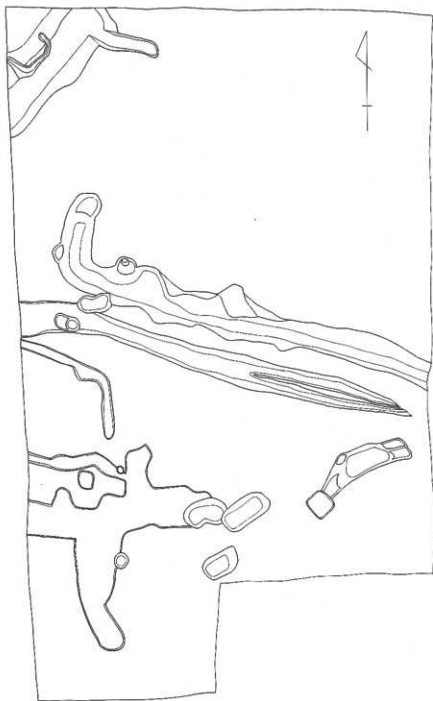
周溝の規模は、深さは現存する遺構上面から1mであるが、幅については調査区の制約を受け墳丘部まで到達できなかったので不明である。しかし、前方部での調査の結果などから、幅約6mで墳丘を囲っていたと考えられる。

周堤の存在については、今回の調査においても確認することができなかったが、周溝端から外側へ約3mの幅で、扇形の傾斜変換線が見られ、あるいはこれが周堤築造時の地山整形の跡かもしれないが、上部が削平されているため、可能性を考えるにとどまらざるを得ない。

その他の遺構

調査区の中央部にはほぼ東西方向に2条の溝状遺構と、南半部分に土壇・柱穴が検出された。北側に位置する溝状遺構は、調査区内の西よりの地点に端を発し、途中屈曲して東方につづいている。

南側のそれは、調査区を東西に横断し、調査区内で消滅する。



第7圖 錢坭塚古墳遺構配置圖(1/150)

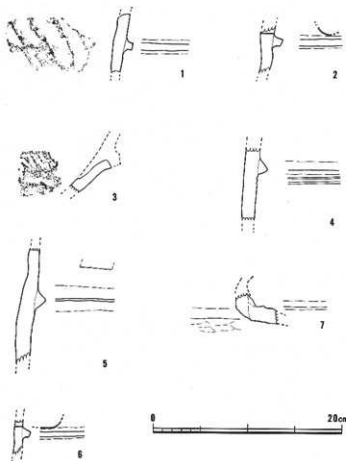
中央付近の溝状遺構の他に、調査区の南半部で、土壇や柱穴を検出したが、それぞれの性格や時期を示唆するものは見られず、銭塚塚古墳との関連については不明である。

遺物

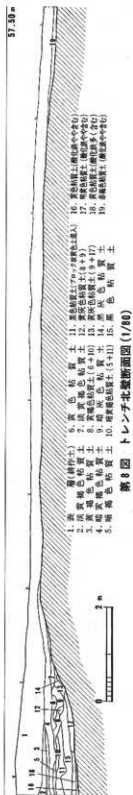
埴輪 (第9図)

出土した図示可能な埴輪片は7個体で、周溝内より3個体(1~3)、表土中より4個体(4~7)であった。

1は、円筒埴輪の胴部突帯部の破片である。やや赤っぽい黄褐色を呈し、胎土は砂粒をやや含み、焼成は良好である。内面は、斜方向のケズリのちコナデで仕上げる。外面は、剥落がいちじるしく調整不明であるが、突帯は比較的シャープな台形突帯でヨコナデが見られる。この破片は、上下とも欠損しているが、粘土帯の接合部と思われる、製作時の粘土帯幅の一



第9図 出土埴輪実測図(1/4)



第8図 トレンチ北壁断面図(1/80)

1. 黄褐色粘土(耕作土)
2. 黄褐色粘土(表土)
3. 黄褐色粘土(8+9)
4. 黄褐色粘土(8+10)
5. 黄褐色粘土(5+11)
6. 黄褐色粘土
7. 黄褐色粘土(8+9)
8. 黄褐色粘土(8+10)
9. 黄褐色粘土(8+11)
10. 黄褐色粘土(5+11)
11. 黄褐色粘土(7+8+9+10)
12. 黄褐色粘土(8+9)
13. 黄褐色粘土(8+10)
14. 黄褐色粘土
15. 黄褐色粘土
16. 黄褐色粘土(黄褐色粘土)
17. 黄褐色粘土(黄褐色粘土)
18. 黄褐色粘土(黄褐色粘土)
19. 黄褐色粘土(黄褐色粘土)

単位と考えられる。

2は、円筒埴輪の胴部突帯部の破片で、赤っぽい黄褐色を呈し、胎土にわずかに砂粒を含み、焼成は良好である。内面はナデ調整で、外面は突帯付近のヨコナデは明瞭であるが他は不明である。突帯は台形で、これに接するように孔（円孔か？）が穿たれていたことがうかがえる。

3は、朝顔形埴輪の口縁屈曲部と思われる。淡い黄褐色を呈し、胎土は砂粒をやや含み、焼成はやや甘い。内外面とも調整は不明であるが、内面には、接合のためのヘラ状工具によるキザミ目が見られる。

4は、円筒埴輪の胴部突帯部の破片で、淡い黄褐色を呈し、胎土には砂粒は少なく、焼成は堅緻である。内面は横方向のハケ調整のちナデで仕上げ、外面はナデ調整である。突帯は、シャープな三角突帯で、突帯の下方には、割り付け線と思われる沈線が見られる。

5は、円筒埴輪の胴部突帯部の破片で、赤褐色を呈し、胎土にかなりの砂粒を含み、焼成はやや甘い。内外面とも剥落がいちじるしく、調整は不明であるが、外面に整形時に生じたと思われる板状工具による調整痕が見られる。突帯は三角形で、やや磨滅しているが、本来はかなりシャープであったと思われる。

6は、円筒埴輪の胴部突帯部の破片で、赤っぽい黄褐色を呈し、胎土は砂粒をやや含み、焼成は堅緻である。内面は横方向のハケ調整のちナデで仕上げ、外面は突帯部ということで、横方向のナデ調整である。突帯の上方に接するように孔（円孔？）が穿たれていたことがうかがえる。

7は、朝顔形埴輪の胴部と口縁部の接合部分と思われる。赤褐色を呈し、胎土は砂粒をわずかに含み、焼成はやや甘い。内面には接合時の圧痕が見られ、外面は横方向のナデが見られるが、突帯が脱落したものである。

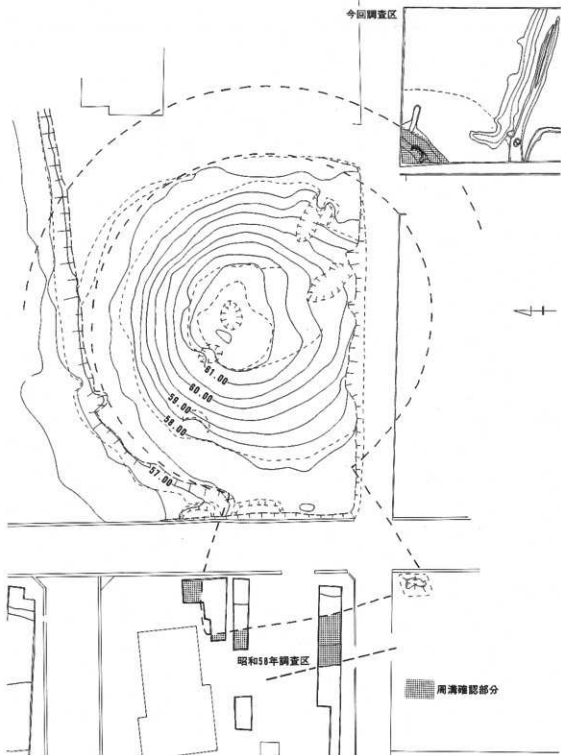
その他の遺物

埴輪片は、この他にも、周溝埋土・表土中から出土したが、図示にたえないので、掲載しなかった。また、埴輪の他、主に表土中から、弥生式土器片から近世の磁器片にいたるまでの遺物が出土したが、これも埴輪と同様の理由から図示しなかった。

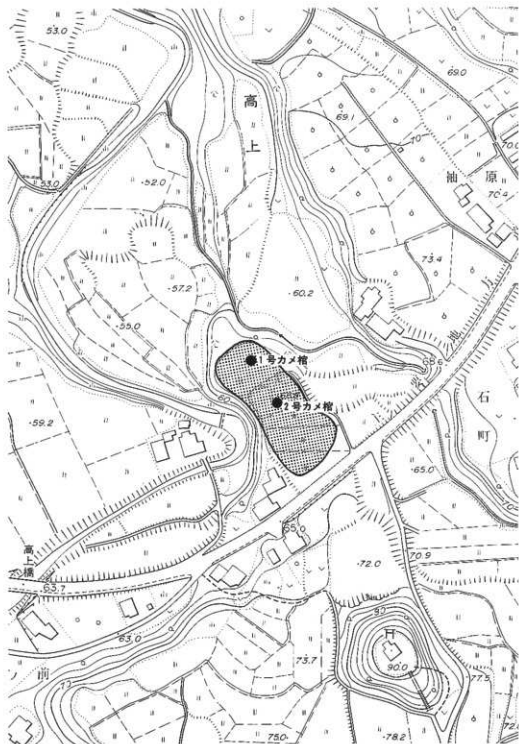
小結

今回の調査によって、一部とはいえ、後円部をめぐる周溝が確認され、前方部周辺と同様に、周溝の存在が裏づけられた。しかし、前回調査からの課題であった「周堤」の存在については、今回も明確な資料を得られなかったことは残念であった。

今後、墳丘、主体部を含む周辺地域の調査によって、銭瓶塚古墳の全体像が明らかになってゆくことを期待する。



第10図 鏡瓶塚古墳実測図(1/400)



第11図 高上石町遺跡位置図(1/2,500)

3. 高上石町遺跡

高上石町遺跡は、北西方向に小さく突き出した舌状台地上にあり、回りの低平地との比高差はおよそ6～8mである。

現在、当該地は、畑地として利用されており、遺跡の発見のきっかけも農作業によることは先述のとおりである。

所有者の井上氏によると、畑地として開墾当初、あちらこちらに窪みがあったということで、今回報告する2基の甕棺

墓の他にも、かなりの遺構が存在すると思われる、甕棺墓群として位置づけられそうである。

遺構

1号甕棺墓(第12図)

墓壇は、大きく削平をうけているため、主軸方向で130cm、幅86cm、深さ34cmの平面楕円の遺構を残すのみである。断面で見ると甕棺の納まった部分がやや深く掘り込まれており、おそらく、この時期の他の甕棺と同様に、縦に墓壇を掘ったのち斜方向に墓壇を施し、甕棺を挿入したものである。

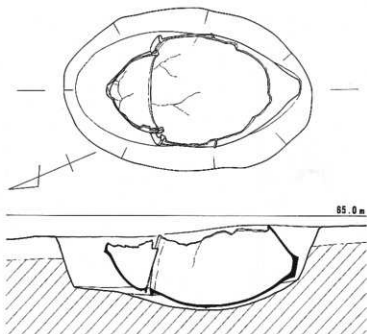
甕棺は、上部の約3分の1が欠損または棺内に崩落している。合わせ口甕棺で、傾斜角12°で埋置されている。上甕の口径が下甕に比してかなり小さいため、上部では隙間が生じていたと思われる、粘土によって密封していたと考えられる。

2号甕棺墓(第13図)

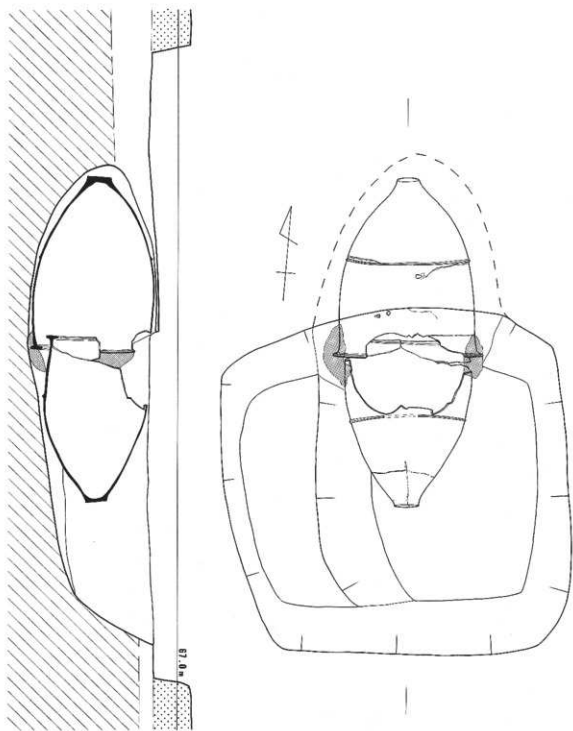
2号甕棺墓は、1号甕棺墓から南東へ約32mのところで発見された。推定される遺跡範囲の中で、1号墓は先端に近いところであったのに比べ、2号墓はほぼ中央部ということが出来る。

墓壇は、一辺約1.5mのほぼ正方形の隅丸方形で、残存する深さは、約60cmである。この墓壇から北に向かって横穴を施し、甕棺を挿入し、ほぼ水平に埋置している。

甕棺は合わせ口式で、上甕が上甕に挿入されたかたちで出土した。合わせ口部には黄褐色粘土による目ばりが施されていた。



第12図 1号甕棺墓実測図(1/20)



第13图 2号墓棺基实测图(1/20)

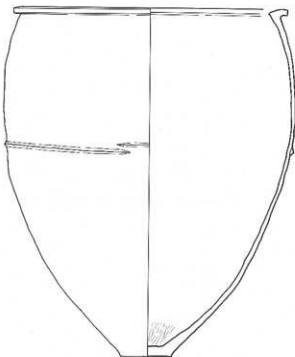
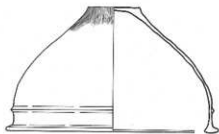
下甕には、上面に、穿孔が見られるが、これは、後世の耕作時に、農耕用の機械などによって生じたものと考えられ、埋葬時に意識的に施したと考えられる穿孔は、認められなかった。

遺物

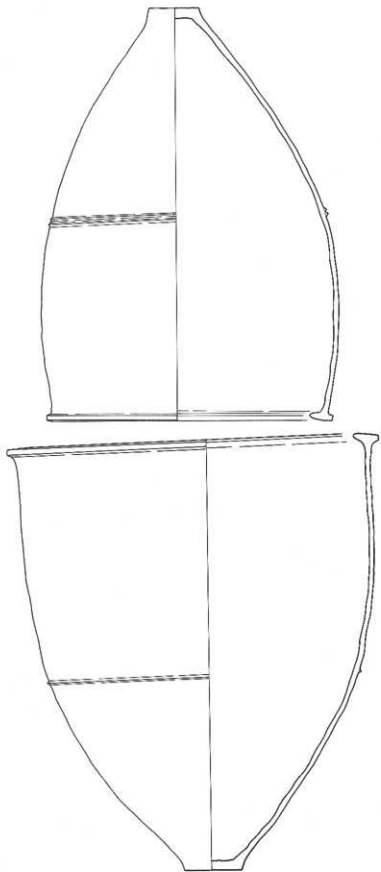
1号甕棺 (第14図)

上甕は、口径50cm、高さ26.4cm、底部径10.8cmを測る。口縁は、内側にやや突出し、上面がややふくらむT字状を呈する。口縁下には1条の三角突帯を有する。底部は平底である。調整は、外面は、口縁から突帯まではヨコナデで、胴部はナデで仕上げているが、ハケ目調整ののちナデたと思われる、底部付近にはハケ目がかかなり明瞭に残っている。また外面の口縁直下に、口縁整形時にツメによって生じたと思われる整形痕が認められる。内面は、口縁部がヨコナデで、他はナデ調整している。内外面ともに、焼成時に生じるいわゆる「黒斑」とは異なる黒色顔料の塗布が見られ、内面に比べ外面の残りはかなりよく、光沢を保っている部位もある。色調は赤褐色を呈し、焼成は良好である。

下甕は、口径58.2cm、高さ74.2cm、底部径10.8cmを測る。口縁は、内側にやや突出し、上面がややふくらむT字状を呈する。胴部中に1条の三角突帯を有するが、その両端は接続していない。底部は平底である。調整は、外面は、口縁部と突帯部分はヨコナデで、他はナデで仕上げているが、おそらく、上甕と同様ハケ目調整ののちナデ調整したと思われる。内面は、口縁部はヨコナデ、他はナデ調整している。上甕と同様に、下甕にも黒色顔料の塗布が見られる。色調は赤褐色を呈し、焼成は良好である。穿孔は認めない。



第14図 1号甕棺実測図(1/8)



第15图 2号墓棺实测图(1/8)

2号甕棺 (第15図)

上甕は、口径60.8cm、高さ87.2cm、底部径11cmを測る。口縁は、内側に大きく突出するT字状で、口縁端部はやや窪んでいる。胴部中位よりやや下方に2条の三角突帯を有するが、部分的に突帯の直下に、ヘラ状工具によって施されたと思われる沈線が認められ、突帯を貼りつける際の削り付け線と思われる。底部は平底である。調整は、外面は、口縁部と突帯部はヨコナデで、他は、ハケ目調整ののちていねいなナデで仕上げている。内面は、口縁部はヨコナデで、他はていねいなナデで仕上げている。内・外面ともに黒色顔料の塗布が認められる。色調は淡黄褐色を呈し、胎土にはかなりの砂粒を含むが、焼成は良好である。

下甕は、口径78.8cm、高さ91.4cm、底部径12.3cmを測る。口縁は、内側に大きく突出するT字状で、外側に向かってやや傾斜している。胴部中位よりやや下方に1条の三角突帯を有する。底部は平底である。調整は、外面は、口縁部と突帯部はヨコナデで、他は、ハケ目調整ののちていねいなナデで仕上げている。内面は、口縁部はヨコナデで、他は、ていねいなナデで仕上げている。内・外面ともに黒色顔料の塗布が認められる。色調は淡黄褐色を呈し、胎土にはかなりの砂粒を含むが、焼成は良好である。

小結

1号甕棺墓、2号甕棺墓ともに、弥生時代中期前半から中葉にかけての時期のものと考えられる。

今回の調査では、2基の甕棺ともに、内外面の黒色顔料の塗布を見出したのが大きな特徴とすることができるが、前述のとおり、まさに緊急的な調査であり、甕棺墓群の全容を明らかにすることができないのが非常に残念である。しかし、今回の調査で、当該地が極めて重要な文化財包蔵地であることが明らかとなり、また、さししまった危機はないとはいえ、今後の耕作によって、わずかずつでも遺跡の破壊が進むことが十分考えられる。今後、適切な対応が必要であると考える。

4. 山北ハビロ遺跡

山北ハビロ遺跡は、雷山山麓の曾根丘陵の基部に所在している。

今回の調査は、事業予定地に対する試掘の結果、遺構の存在が明らかになった約150㎡に対して実施した。当該地は、後世の削平が著しく、掘立柱建物跡1軒と調査区の北西隅に1条の溝条遺構を検出したのみであった。

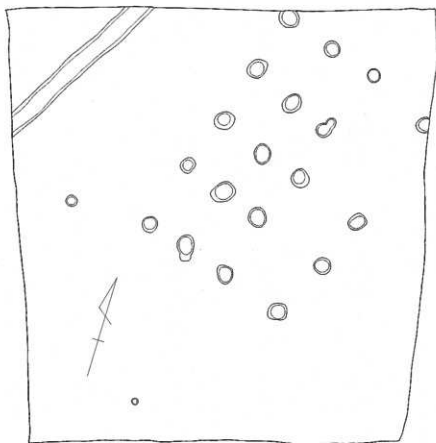
遺構

掘立柱建物跡 (第18図)

主軸をN-19°-Eにおく、4間×3間の建物である。柱間の距離は、主軸方向が北側から、160cm・150cm・165cm・173cmで、南側がやや広いものの、全体的にはほぼ等間隔の観があるが、



第16図 山北ハビロ遺跡の調査区とその周辺(1/2,500)

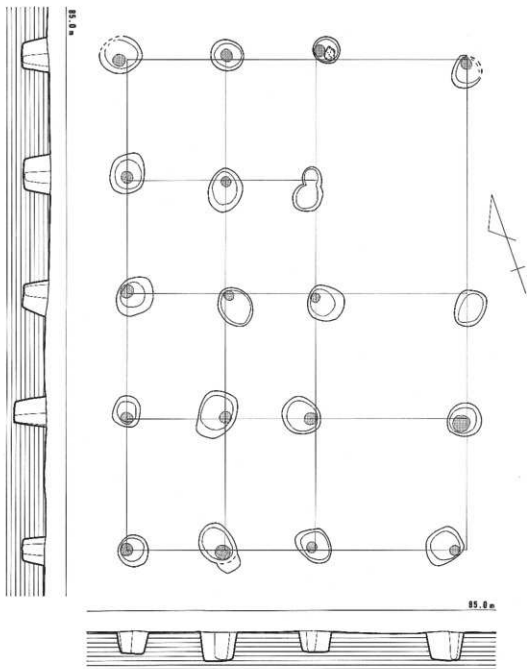


第17図 山北ハヒロ遺跡遺構配置図(1/100)

主軸と直行方向では、西側から、130cm・120cm・200cmとなっており、東側のそれが、他に比べて広がっている。柱穴は、全部で19個を検出したが、建物の北東部分で一箇所検出しなかった。他の柱穴の残存状況から見るかぎり、後世の削平によって消失したとは考えにくく、建築当時から柱穴は存在しなかったと思われる。とすれば、この位置が、この建物の入り口であったとして差しつかえないものとする。

溝状遺構

調査区の北西部で、掘立柱建物の主軸にはほぼ同じ方向で1条の溝を検出した。幅約55cmで、残存する深さは約7cmであるが、検出した長さが約4.5mと短く、その性格を具体的に知り得る形では調査できなかった。



第18图 掘立柱建物跡実測图(1/50)

遺物

掘立柱建物跡の柱穴内からは、古式土師器や弥生式土器の細片が出土したが、実測に耐えるものではなく、図示できなかった。

溝状遺構からは、その検出長が短いということもあって、遺物は出土しなかった。

小結

今回調査した、掘立柱建物跡、溝状遺構ともに、遺物が乏しく、その時期を確定するような資料は見い出せないが、出土した遺物などから、一応の整理をしておく。

掘立柱建物の時期については、柱穴内からの出土土器片からしか判断することはできないが、その内容を見ると、全ての細片が古式土師器以前の土器のものであり、古墳時代前期ごろまでさかのぼる可能性がある。

溝状遺構については、当初、その方向が掘立柱建物跡の主軸方向とほぼ同じであることから、同時代のものかと考えられたが、埋土が柱穴のそれとまったく異なることから、時期はもっと後のものであると判断する。

Ⅳ. 結 語

今回の報告に掲載した各遺跡が位置している曾根丘陵は、国指定史跡「曾根遺跡群」の存在を指摘するまでもなく、糸島地方の古代文化を解明する上で、最も重要な地域のひとつである。とりわけ、古墳時代の墳墓については、東側に位置する三雲・井原地区との関係について、注目されることである。

しかし、近年、人口の増加がつづいている本町において、この曾根地区は、住宅地として開発が進んでおり、重要な埋蔵文化財が危険な状況に置かれている。今後とも、一層の努力によって、重要な文化財の調査・記録・保存・整備に努めなければならないと、いまさらながら、自戒するものである。

最後に、今回の各調査を実施するにあたって、文化財行政にご理解をいただき、ご協力いただいた、各方面の方々に、心から謝意を表して、結びとする。

註1 「曾根遺跡群—平原遺跡・狐塚古墳・銭瓶塚古墳・ワレ塚古墳」。昭和56年10月4日指定。

2 鍋嶋さとみ編「曾根遺跡群Ⅱ」（前原町文化財調査報告書第14集 1984年）

3 原田大六「福岡県糸島郡平原弥生古墳発掘調査概報」（福岡県教育委員会 1965年）

4 林 覚編「曾根遺跡群」（前原町文化財調査報告書第7集 1982年）

圖 版



ワレ塚古墳Ⅰトレンチ



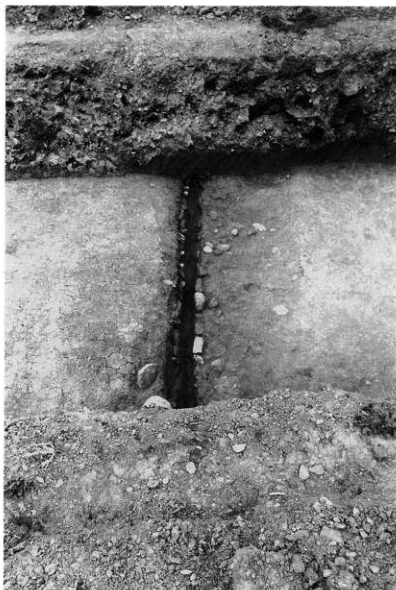
同Ⅱトレンチ



ワレ塚古墳Ⅲトレンチ



同SD-01



ワレ塚古墳 SX-01



鏡瓶塚古墳調査区全景（南から。左上方が後円部）



同上（東から）



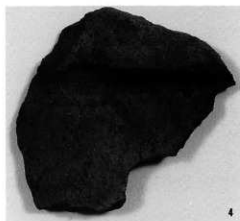
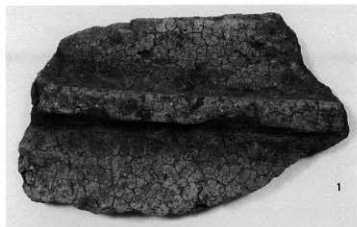
銭瓶塚古墳周溝出土状況（後方は後円部）



同上近景



鉄瓶塚古墳周溝土層断面（南から）



鏡坂塚古墳出土埴輪



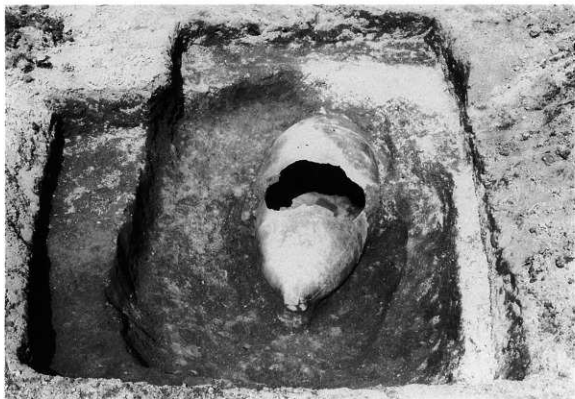
高上石町遺跡遠景（東から）



同上（北から）



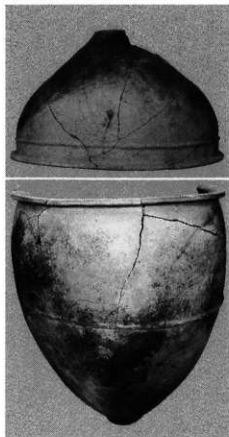
高上石町遺跡 1号甕棺墓



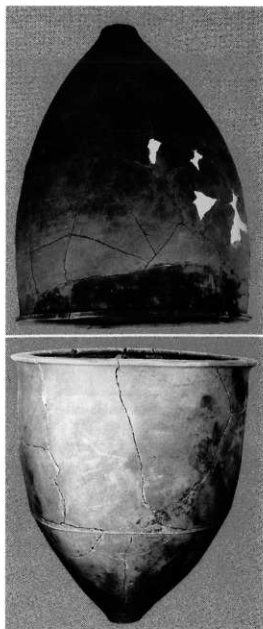
高上石町遺跡 2号甕棺墓



高上石町遺跡 2号壺棺墓



高上石町遺跡1号壺棺



高上石町2号壺棺

曾根遺跡群Ⅳ

前原町文化財調査報告書

第 27 集

昭和63年 3 月31日

発 行 前 原 町 教 育 委 員 会
福岡県糸島郡前原町大字前原 6 2 3

印 刷 青 柳 工 業 株 式 会 社 印 刷 部
福岡市中央区渡辺通二丁目 9 - 31

